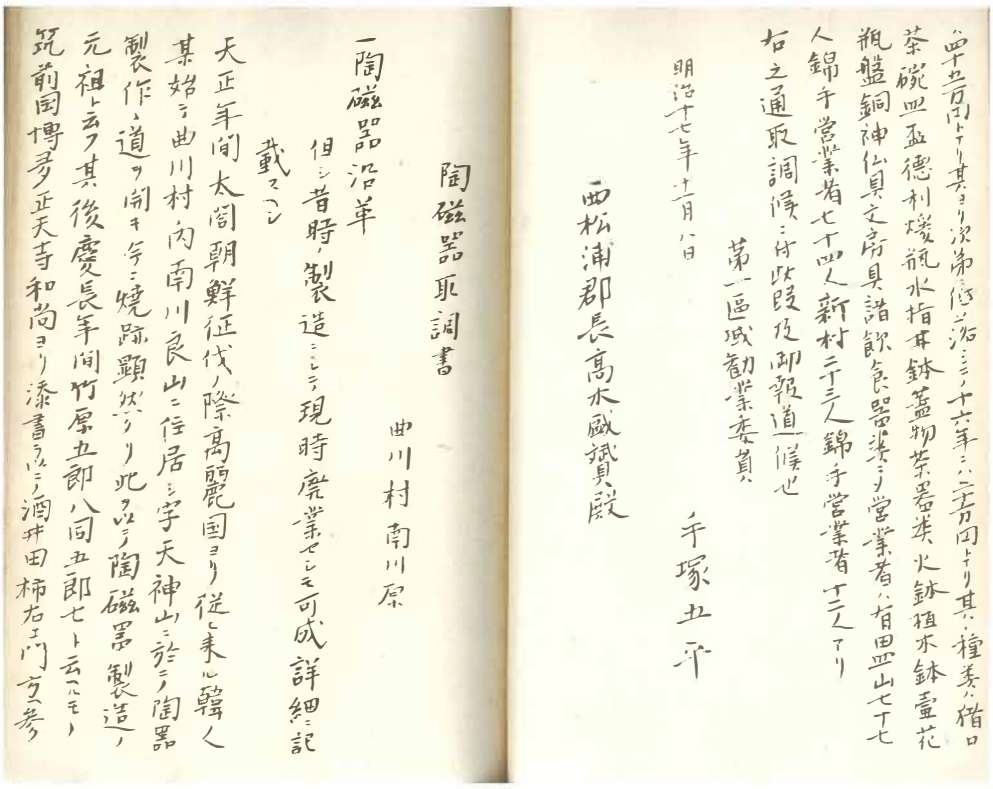
『陶磁器沿革其他取調書』(写)　陶器沿革史部分



陶磁器取調書

曲川村南川原

但シ昔時ノ製造ニシテ現時廃業セシモ可成詳細ニ記載マシ

一陶磁器沿革

天正年間太閤朝鮮征伐ノ際高麗国ヨリ従ヒ来ル韓人某始メ曲川村内南川良山ニ住居シ字天神山ニ於テ陶器製作ノ道ヲ開キ今ニ焼跡顕然タリ此ヲ以テ陶磁器製造ノ元祖ト云フ其後慶長年間竹原五郎八同五郎七ト云ヘモノ筑前国博多正天寺和尚ヨリ添書ヲ以テ酒井田柿右エ門方ニ参

『陶磁器沿革其他取調書』(写)　有田皿山末尾および南川原山冒頭部分

『陶磁器沿革其他取調書』（写）について

佐賀県立九州陶磁文化館　藤原友子

『陶磁器沿革其他取調書』（写）一冊は平成十二年、佐賀県立九州陶磁文化館が佐賀市内の某古書店より購入したものである。すべての頁が丁寧に裏打ちされた状態に修復されたのち、渋紙の表紙がつけられ和綴じ一冊に装丁されている。写しは全て一人の手によるものである。当該文献の記載内容は左記のとおり。報告地の現在の行政地区名は筆者が補った。

タイトルおよび記載内容	紀年	記載頁	報告地の現在の行政地区名
陶器沿革史	（明治十九年写し）	一〇頁	
陶磁器取調書　西松浦郡有田皿山　新村	（明治十七年十一月八日）	一七頁……西松浦郡有田町	
陶磁器取調書　西松浦郡曲川村南川原	（明治十七年十一月十五日）	二二頁……西松浦郡有田町南川原・西有田町曲川・大木	
陶磁器取調書　大川内村市ノ瀬村（山）	（日付なし）	二六頁……伊万里市大川内町甲	
陶磁器取調書　西松浦郡大川内村大川内山	（日付なし）	二九頁……伊万里市大川内町乙	
陶磁器取調書　西松浦郡椎峯山	（明治十七年十一月十九日）	三三頁……伊万里市南波多町府招	
陶磁器取調書　東松浦郡	（明治十七年十一月）	三五頁……唐津市・東松浦郡	
陶磁器取調書　藤津郡久間村志田村（山）	（日付なし）	三九頁……藤津郡塩田町久間	
陶器取調書　藤津郡吉田村吉田皿山	（日付なし）	四三頁……藤津郡嬉野町吉田	
陶磁器取調書　藤津郡下宿村内野山	（明治十七年十二月）	四六頁……藤津郡嬉野町下宿	
陶磁器取調書　藤津郡五町田美野山	（日付なし）	四九頁……藤津郡嬉野町美野	
陶磁器取調書　藤津郡八本木村濱皿山	（明治十七年十二月）	五〇頁……鹿島市浜町皿山	
磁器取調書　杵島郡芦原村成瀬	（明治十七年十一月）	五三頁……武雄市橘町芦原	
陶磁器取調書　杵島郡真手野村字黒牟田山	（日付なし）	五五頁……武雄市武内町真手野字黒牟田	
陶磁器取調書　小田志村	（明治十七年十一月十五日）	五七頁……武雄市西川登町小田志	

陶磁器取調書　小城郡小侍村　（日付なし）　六一頁……多久市北多久町小侍
陶磁器取調書　佐賀郡久留間村　（明治十七年十二月）　六二頁……佐賀郡大和町久留間
陶磁器取調書　養父郡白壁村　（日付なし）　六五頁……三養基郡みやき町白壁
陶磁器取調書　養父郡白壁村協力会社　（明治十七年十二月）　六七頁……三養基郡みやき町白壁
陶磁器取調書　江島村　（日付なし）　六九頁……鳥栖市江島町
陶磁器取調書　田代村　（日付なし）　七〇頁……鳥栖市田代町
陶磁器取調書　牛原村　（日付なし）　七二頁……鳥栖市牛原町

冒頭の陶器沿革からはじまり、佐賀県下の二十一箇所の窯業地に関する取調書が続いている。陶器沿革に、「明治十九年丙戌十一月佐賀県ニ於テ写ス柏坡[1]」とあることから、この柏坡なる人物が明治十九年に佐賀県で書き写した行政文書であることがわかる。現在のところ、原本は未発見であり、明治十七年（一八八四年）[2]における佐賀県下における陶磁器生産をまとめた史料をほぼ同時代に写したものとして貴重なものである。西松浦郡の三窯業地を報告した原利一郎の報告において、末文に「勧第二八五号ヲ以テ御達シ相成候陶器取調（以下略）」とある。これにより、この取調書は佐賀県勧業課からの達し文書により調査を求められたものであることがわかる。原本は、明治十七年当時現地で陶磁器業あるいは地元経済に関わったものにより郡長へ提出された報告書であり、したがって、誰の手によるにせよ、その写しである当文献は陶磁器生産に関する内容については信頼性の高い史料といえよう。報告地および報告者については次のとおりであり、報告者名に勧業委員がみられる。

報告地	報告者
西松浦郡有田皿山　新村	手塚五平（第一区域勧業委員）
西松浦郡曲川村南川原	西山兵助（第二区域勧業委員）

1　この柏坡なる人物が何者であったかは不明。しかし、柏坡を名乗る人物では、鎌倉女学院創立者である漢学者、田邊新之助（唐津生まれ一八六二年～一九四四年）がいる。欧陽脩になぞらえ、中表紙で自らを酔翁と自称していることから、田邊新之助の可能性も示唆しておきたい。

2　原利一郎については詳細不明。第四区域勧業委員であることがわかる。

西松浦郡大川内村市ノ瀬村㈲　原　利一郎（第四区域勧業委員）
西松浦郡大川内村大川内山
西松浦郡椎峯山
東松浦郡　東松浦郡役所
藤津郡久間村志田村㈲
藤津郡吉田村吉田皿山
藤津郡下宿村内野山　冨永清兵衛　北島佐太郎（藤津郡内野山名陶磁器製造人惣代）
藤津郡五町田美野山
藤津郡八本木村濱皿山　岩永幸一　乗田貞平（藤津郡八本木村皿山陶器営業人惣代）
杵島郡芦原村成瀬　久保忠造　田中民助　副島亀三
杵島郡真手野村字黒牟田山
小田志村　淵　龍之亟
小城郡小侍村
佐賀郡久留間村　秀島勇造　横尾斅献　外三拾八名（営業人）
養父郡白壁村　武富真胤　桝谷判平　佐藤判七　山崎嘉六　藤永市助（戸長）
養父郡白壁村協力会社　田中英一（社長）　藤永市助（戸長）
江島村　西牟田　光（江島村外二ヶ村戸長）
田代村　原　精一郎（田代村外四ヶ村戸長）
牛原村

明治期、工業、商業、農業上の有力人物を勧業委員とし、勧業委員による談話会が開催された。この取調が報告された明治十七年五月には、前年に長崎県から佐賀県が分離したのを契機に佐賀県は『勧業委員および各勧業会設置準則』を公布し、勧業談話会を復活させたという。[3] 明

3　中山成基著　昭和四九年八月一日佐賀新聞社発行『佐賀県経済百年史』五四頁

治の日本政府は、共進会や内国勧業博覧会などの開催によって、産業振興をはかっていた。とりわけ明治十七年頃は共進会が盛んに開催されており、こうした中で、行政側には各地の生産情況を把握する必要があったものと考えられる。明治十年代に記録された佐賀県の窯業地に関する行政資料には、当該文献のほか長崎県立図書館が所蔵する長崎県勧業課商工務関係事務簿中の、明治十四年京都府博物館からの依頼による『県内陶器製造沿革調』[4]や佐賀県立図書館が所蔵する明治十年『第一回内国博覧会出品目録并解説書褒状写』[5]および明治十四年『第二回内国博覧会出品願并出品解説書』[6]がある。京都府博物館の展示解説や、内国博覧会への出品物を解説するために必要な、説明資料としてこれらの以上の史料は産地の沿革報告をともなっている。このことから、当該史料が、明治十八年に開催が予定されていた五品共進会[7]にそなえて、調査されたのではないかと推測される。さらに明治十九年には、共進会に出品された全国陶器産地の沿革を陶器報告員である塩田真が集成した『府県陶器沿革陶工伝統誌』[8]もある。これは各窯業地の沿革が県ごとに収録されており、共進会に出品されている陶磁器産地についての農商務省の解説書である。

当史料においても、窯業沿革については、こうした明治十年代の行政資料とよく似た内容が語られている。しかし、沿革に続く部分は産地ごとの製造法や生産高について詳細に述べられており、この点が前述の明治十年代の行政資料とは大きく異なっている。この部分が、この史料の重要性を高めており、製造方法の変化によって現在には失われてしまった明治十七年当時の材料や窯などの製造に関する情報を提供してくれる。また、各産地の統計的な産出高の報告は明治十一年から十六年の六年間についてとりまとめていることから、明治十年代の日本が経験した松方財政によるインフレとデフレについても窯の生産推移からみてとれる。たとえば久間村および志田村の生産高については明治十二年から十六年の生産高が報告されているが、明治十二年には四〇八〇〇円、明治十三年七八〇〇〇円、明治十四年には八五二〇〇円まで高騰し、明治十五年には三五二〇〇円に急落し、明治十六年は二一八五〇円となっている。こうした高騰と下落は各地の報告にも語られる。この

4 長崎県立図書館郷土課所蔵『著名物産地表、陶器製造沿革調、諸会社一覧表』勧業課商工務係事務簿、明治一三年～同一六年

5 佐賀県立図書館所蔵　県21―18　『第一回内国博覧会出品目録并解説書褒状写』

6 佐賀県立図書館所蔵　県21―26　『第二回内国博覧会出品願并出品解説書』

7 明治一八年三月に東京上野を会場として五品（繭、絹糸、織物、陶器、漆器）共進会が開設された。西松浦郡の出品総代は手塚五平であり、共進会開催にともなう陶磁器に関する会議「集談会」に手塚五平および田中英一が参加している。主に当時の松方デフレに対する打開策が議題となり、組合の設立のもととなる建言書を西郷従道農商務卿に提出している。有田町発行『有田町史商業編二』中島浩氣著『肥前陶磁史考』六三六頁

8 国会図書館所蔵ＹＤＭ７２２５３／33―96塩田真『府県陶器沿革陶工伝統誌』農商務省編　有隣堂　塩田真は農商務省に全国から提出された『陶磁器沿革其他調書』を参考にした可能性は高いが、佐賀県の該当地区を比較すると、より多くの情報を収集して、同書をまとめている。

ような経済状況の中、この取調にある窯業地のうち、すでに生産がたちいかなくなったものがみられ、久留間村、田代村、牛原村など報告されている窯業地は終業し、ほかの生産地でも衰退の危機を訴えている。このような概況の中でこの取調書はまとめられており、産業情況の盛衰を把握できる。したがって前述したとおり、この取調書は来る五品共進会開催に関連して作成されたものと推測できるのである。

製作地区	生産額（円）	備　　考
西松浦郡有田皿山　新村	200,000.00	明治16年
藤津郡吉田村吉田皿山	37,895.60	明治12年から16年の５年間の平均
藤津郡久間村志田山	21,850.00	明治16年
藤津郡八本木村濱皿山	12,344.48	明治12年から16年の５年間の平均
西松浦郡曲川村	8,000.00	明治16年
小田志村	7,800.00	明治16年
西松浦郡大川内村市ノ瀬山	5,900.00	明治15、16年平均
養父郡白壁村	4,666.00	明治10年から17年の８年間の平均
杵島郡芦原村成瀬	4,500.00	明治14年から16年の３年間の平均
西松浦郡大川内村大川内山	3,500.00	明治15、16年平均
藤津郡五町田美野山	3,360.00	明治14年創業により報告年まで４年間平均
養父郡白壁村協力会社	2,500.00	明治16年から17年までの１年間
藤津郡下宿村内野山	1,540.00	明治11年から16年の６年間の平均
杵島郡真手野村字黒牟田山	1,076.00	明治16年
西松浦郡椎峯山	550.00	明治16年
江島村	113.40	明治12年から17年まで６年間の平均
小城郡小侍村	112.00	明治16年か
東松浦郡	0.00	非売品につき価格なしとある
佐賀郡久留間村	0.00	明治８年生産中止　明治８年の額は600円
田代村	0.00	明治15年生産中止　明治15年の額は100円
牛原村	0.00	明治15年生産中止　明治15年の額は1020円

表三　生産額一覧（生産額の小数点以下の単位は銭）

表三はこの取調書から明治一六年の生産額を額の多い順にあらわしたものである。有田皿山を筆頭に吉田皿山、志田が続く。有田皿山が占める割合はおよそ六一パーセントであり、有田の生産力の高さがあきらかである。しかしながら、報告されている窯業地にはもれがある可能性がある。とくに杵島郡内の報告は不完全な様相を呈している。甕などを生産した陶器窯についての報告がなく、また、この頃には廃窯していたのかもしれないが、江戸後期に大量の磁器を生産した山内町の筒江窯の報告もない。甕については、東松浦郡相知町押川と杵島郡の成瀬や上野が当時かなりの生産があったとされるが[9]、当史料には成瀬における磁器の報告だけが収録されている。このような報告もれが加わると、有田の占める割合はおそらく数パーセントは下るであろう。

こうした各地の報告には産地の紹介として沿革からはじめ、その原料から製造法について一定の順序とスタイルがある。その項目は以下のとおりであり、（　）内はその報告内容の要点を筆者が加えたものである。

一、沿革
一、原料の土石産地（他所からの買取の有無・混合土）
一、土石産出高（重量・価格・営業人数）
一、原料準備（調整時の減少割合）
一、造坏（轆轤・石膏型・木型の使用）
一、素焼（素焼窯の形式）
一、本窯（固有式か欧州式か）
一、釉薬（調合法・灰の産地）
一、本焼（一回における焼成個数および破損の割合）
一、粉飾用諸顔料（種類・調合分量）
一、製出高（製品の種類・営業人の数）

9　中島浩氣著『肥前陶磁史考』昭和十一年　二〇七頁

報告者の力点の置きようや窯場の特徴によって解説には長短あるが、二十一すべての窯場における上記項目が報告されている。これにより、明治三年にワグネルによって教授され導入されたばかりの西洋コバルトがほとんどの磁器窯で使用されていることや有田のような先進的な窯場では石膏型が使用されていることがわかり、当時の窯業地における製法について多くの情報を提供してくれる。

例えば原料産地についてなどは、有田の泉山の陶石を使用できる地域との格差があり、江戸時代の基本的な土の配分を踏襲していることがわかる。肥後の天草陶石が広く使用され、地元で産出する原料を混ぜたり、製品によって使い分けている様子も伺える。原料の調整は各地で工夫され、主だった原料の産地は磁器ならば泉山や天草、陶器については真手野のものを使用するなど、おおまかな傾向はあるものの基本的には各地で土が調合され製造されている。

西松浦郡有田皿山　新村＝西松浦郡有田皿山字泉山・象ノ鼻・保（屋）谷・鷹取・大谷・舞々谷・白川谷の陶石

西松浦郡曲川村南川原＝肥前国松浦郡有田皿山字泉山陶石

大川内山市ノ瀬村＝有田皿山字泉山の陶石

西松浦郡大川内山大川内村＝西松浦郡町裏村字大堤の陶土および大川内村字四本柳の陶石を釉薬に調合、ただし、氷輪焼については有田皿山字泉山の陶石

西松浦郡椎峯山＝肥前国西松浦郡笠椎村字花畑および井手口の土を混合

東松浦郡＝東松浦郡出野村笠椎村同郡加部島村同郡有浦村字牟加多同郡谷口村

（人形置物類）椎村同郡寒神田村字山口同村字北ノ崎の三品

（青磁類）笠椎加部島牟形妙見村山口村字北ノ崎の三品

藤津郡久間村志田村＝肥後国天草郡古坐床深江土路々の各地

藤津郡吉田村吉田皿山＝肥後国天草郡深江村産出の陶石および當藤津郡吉田村字梨子ノ木田の陶土

藤津郡下宿村内野山＝（陶土）當地方の土のみ（磁器）熊本県下天草産出の石に当郡岩屋川内村字鬼岩産ノ石を調和

藤津郡五町田美野山＝肥後国天草郡より産出する荒石

藤津郡八本木村濱皿山＝肥後国天草深江村産出の陶石

杵島郡芦原村成瀬＝肥後国天草郡字深江小砂床伊口山等より出るものを元とし肥前国杵島郡真手（野）村ノ土を調和

杵島郡真手野村字黒牟田山＝原料は淡黒色の粘土で杵島郡真手野村字藤原より採取しこれに所在の赤土を混和

小田志村＝（陶器）肥前国杵島郡小田志村および隣村永野村等より出る粘土等を混和

＝（磁器）肥後国天草島字深江小砂床高濱より出るものを元に肥前国杵島郡神六村字権現山の石を調和

小城郡小侍村＝肥前国小城郡小侍村字砂原

佐賀郡久留間村＝肥前国久留間村の内今山分字向坂山ただし肥後国天草産の石を調和

養父郡白壁村＝肥前国養父郡白壁村字明神山土坑より産出するもの、および肥後ノ国天草郡（古）座床村の陶石

養父郡白壁村協力会社＝肥前国養父郡立岩村字内野山の土石、肥後国天草郡小座床村の土石を調合

江島村＝肥前国養父郡江島村字所熊山

田代村＝肥前国基肄郡柚比村字漆川原肥後国天草郡高濱

牛原村＝肥前国養父郡牛原村道光山より掘取りこれに熊本県下天草の産石を加えて調和

このように、明治十七年頃の佐賀県は各地に窯場があり、それぞれ原料が異なる多様な生産地であった。廃藩置県後、藩の保護を失い困窮した窯場もあり、激しいインフレとデフレという経済状況に翻弄されながら明治という変化の激しい時代に対面した佐賀県各地の窯業の一時代をこの史料から読み取ることができる。この後もさらに各地の窯場は一部消沈したり、新しく会社が設立するなど、変貌と栄枯盛衰をみることになるのであるが、一時期の生産情況について確実な情報を提供するものと信じ、本史料が佐賀県のみならず日本の近代窯業研究の一助になることを願うものである。

末筆ながら、多忙な中校閲をいただいた有田町歴史民俗資料館尾崎葉子氏をはじめ、本稿の作成にあたって御教示を賜った当館副館長大橋康二氏、佐賀県窯業技術センター納富悟氏、元センター長河口純一氏、佐賀県歴史文書閲覧室平尾洋美氏に厚く謝意を表する。